

---

# さちこと風駕のフーガ

倉十

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さちこと風駕のフーガ

### 【Nコード】

N1445A

### 【作者名】

倉十

### 【あらすじ】

結婚をしようと決心したさちこ。過去と今の間でゆれる父風駕。大事なところで家族を支えている母風花。さちこと風駕の心の中で何かが変わったとき、家族のちからは発揮される。

## 結婚話

### 第一章 結婚話

さちこは我が父風駕に婚約したことを話そうとした相手はあえて名前は出さないが

Pさん。

本当は今日一緒に話すつもりだったが急に仕事が入ったのでそっちに行ってしまった。

「本当に結婚する気…あんのかなあ」

不安に思うさちこ

「でも言わなきゃ」

と、風駕に話すため、風駕の部屋へと向かった。

く風駕の部屋く

「おパパー！話があんだけど…」

さちこの父、風駕の部屋は純和風だ。

ふすまの上には娘さちこの写真が堂々と飾ってあった。

「ん？なんだい？愛する我が娘よ」

「うー！！」

「どうしたんだいい？さちこ」

とてもキモイ声で応えた風駕にさちこは言った。

「えっと…私、結婚することにしたから」

さちこがこれを言ったとき、風駕の後ろで大きくうねっている波を見た。

（まあこうなることは予想してたシイ）

そして考える。

（どっせ今、おパパの頭の中では”運命”が流れてるんでしょ）  
と、

確かに今風駕の頭の中では”運命”が流れていた。

「じゃ、話すことはこれだけ」

さちこは障子を開けて出て行こうとする。

「それと…」

出る瞬間、さちこは静かに言った。

「結婚式には来ないでくれる？おパパが来ると…恥ずかしい。それに私の父ってばれた　　ら嫌だから…」

コト

障子の閉まる音が静かに”しん”と鳴った部屋全体に響いた。

## 病くやまいく

### 第2章 病

さちこの父風駕はその日からさちこと話すことが少なくなった。

丸一日、一回も話さない日や、一回も目をあわさない日もあった。

それどころか、部屋から一步も出ない日も少なくはなくなってきた。その様子を毎日見ていたさちこの母風花は堪えきれずに、さちこに聞いた。

「ねえ、さちこ。いつたい風駕となにがあつたの？」

「…べ、別に何にも無いよ」

無愛想なさちこに母、風化の勘が働いた。

「あんた、風駕にひどいこと言つたんだな？」

ずいつと近づいてきた母に吃驚して、読んでいた雑誌を落としてしまった。

さちこは不機嫌な顔をしていった。

「だって、あの話し方メツチャキモイんだよ？おかかはなんでおパパと結婚したの？」

逆に、問う。

すると風花は何かひらめいたときののように手をポンと鳴らした。

「そっか…あんたに入つてなかつたっけな」

「何を？」

興味がないと言つたような声で聞く。

「あんたの姉のこと」

「はい！？」

さちこが驚愕の声を上げると、風花はやっぱりな。というような顔をしていた。

風花はさちこに姉のことで知っている限り総てのことを話した。

さちこには2人、姉がいた。

1人は都市の近く中のよかった姉。

そしてもう1人はさちこの知らない姉。

さちこはもちろんその姉の存在を知らなかった。

その姉は5歳のとき無理矢理、或るヒトに引き取られたのだという。そのときのショックで風驚は心の病になってしまった。

それが10年ぐらい続いたとき、次は仲の良かった姉が風驚の前で残酷な殺し方で殺された。

その日から心の病は深くなってしまった。

そして、あと一人。

残された子”さちこ”を一生懸命守ろうとしてあんなふうになってしまったという。

あれでも、毎日必死にさちこだけには暗い顔を見せまいとがんばっているのだという。

このことをいつになく真剣に聞いていたさちこは、風化が話し終えた後、無言で自分の部屋へといった。

その夜。

さちこは考えた。

深く、深く…

## 思ひ出

### 第3章 思ひ出

さちこの父風駕は自分の部屋から一步も出ない生活をしていた。

その間、風駕はずっとアルバムえを見ていた。

昔、風駕はいつもカメラを持ち歩いていた。

あの日：あの日もカメラを持っていた。あの写真が、さちこの姉の最後の写真だった：。

いつものように部屋の中から窓の外を写していた。

その日は、姉と風駕。2人だけだった。

急に姉の悲鳴が聞こえた。

何事かと思って、障子の隙間からそつと見てみると、さちこの姉が誰かに襲われていた。

風駕は、ただ、見ていることしか出来なかった。

そして無意識にカメラを向ける。

その瞬間、姉が血だらけで障子に倒れこむ。

風駕はほぼ反射神経というべきような感じでカメラのシャッターを押した。

風駕はその写真を見る。

写真は真っ赤だ。

さちこの姉が血だらけで大アップで写っていた。

風駕はぎりつと唇を噛んだ。

なぜあの時自分は助けようとしなかったんだ：

次にさちこの写真を見た。

笑顔で・・・大アップで写っている。

- 結婚式には・・・こないでくれる？ -

さちこの言葉が脳裏で鮮明に甦る。

今までの楽しい思い出はもう帰ってこない。それはもう判っていること。

なのに願ったしまう。

またそのような時期がきてほしい・・・と

古いアルバムをめくる

その写真は総てヒトの笑顔。

その笑顔を見ている間に、それが映像をなつて流れる。

今まで心の中に詰まっていたいろいろな

”何か”

が涙となつて流れ出す。

風罵は声がかかるまで叫び続けた。

過去の自分と、今の自分に一線を引くように。

その声は、さちこの心まで届いた。

「やっぱり・・・かわなければ・・・」

## 出発点

最終章 出発点・強さ

この日から風駕は普通に生活するようになった。

さちこもいるものように、風駕と話すようになった。

それを見ていた風花は、その様子と前の様子も比べて少し考えた。

（何か・・・違う・・・）

だがそれはさちこと風駕が話しているとき、それを聞いて簡単に合点がついた。

（話し方が違う・・・）

風花は風駕に聞きに行った。

「ちょっと、あんた大丈夫なの？ずっと籠もってて、立て籠もり犯として警察に通報するとだったよ」

それを聞いて、風駕は苦笑して言った。

「そう？ならもう少し籠もって、騒ぎを起こせばよかったかな？いやー、残念、残念」

「このバカッ！！」

と言うのと同時に風花は泣き出した。

「本っ当にバカア・・・」

「ごめん・・・」

さちこは風花に尋ねた。

「・・・おパパ・・・話し方変えたね・・・」

「そうだね・・・」

「私の・・・せい？私があんなこと言ったから？」

風花はさちこを見て言った。

「あんたはそう思ってたんの？」

逆に尋ねられた。

「思ってるから言ってるの!!」

「なら、そうなんじゃない？」

さちこは俯く。

「でも・・・」

風花は静かに言葉を紡いだ・・・

「でも、風駕はそう思っていないと思うよ？」

「え？どういう・・・」

「たぶん、今までの思いが全部出たから・・・だから、此処を新しい出発点としていこうと思　ったんじゃないの？」

風花はさちこの頭を撫ぜながら言った。

さちこは風化の言葉から疑問を持ち出して聞く。

「なんで・・・わかるの？そんなこと」

風花はさちこの頭に手を置いたまま、しゃがんで目線を合わせた。

「そりゃ勿論、夫婦だから」

さちこはまたさらに俯く。

それを見た風花は晒う様にして言った。

「あんた、頭でかくなったね」

「なっ!!!!!!!!」

さちこはがばつと顔を上げ、頭の上にある風花の手を払いのけた。風花はそれをみて笑っていった。

「ほら、元気が出た。明日からもがんばりなっ」

それを受けさちこも笑う。

「うん。私は明日を出発点として頑張る」

今日、さちこは不安だった。

（お父さん、来るかなあ・・・）

さちこの結婚式は小さかった。

お金が無い・・・わけではない。  
自らそう望んだ。

司会者も無く、料理も出なければケーキも無い。  
ただ形だけの結婚式だ。

だが、いちよう新婦と両親の話はある。  
集まるのは、家族と身近な親戚だけ。

「えーっと、本日はおそらくお忙しい中ありがとうございました。」  
新婦、さちこのスピーチが始まった。

「えー、私は先ほど1つうそを言いました。私の父は病気でこの場にいないではありません」  
会場がざわつく。

「私が”来るな”と言ってしまいました。私がそういった日は、父に婚約の話をしたときです。そのときは本当に”来るな”と思いました。その日から父とは顔を合われなくなりました。父は心の病気を負っています。私があんたことを言ってしまったので・・・」

バタッ！！！！

スピーチの途中で会場の扉が開いた。  
皆そのほうを向く。

「父さん！！」  
さちこが叫ぶ。

風鷲は深く頭を下げ、言った。

「遅くなつてすみませんでした。スピーチを続けてください」  
促されさちこはスピーチを始めた。

「私があんなことを言ってしまったので余計病が深くなつていったのでしよう。それも、そのはず。いや、そうでなければおかしいほ  
どです。父は目の前で私の姉が殺されたのですから。」

会場がざわざわと鳴る。さちこはかまわず続けた。

「ですが、昨日です。昨日父が一週間ぶりに出てきました。その時、  
私は父の強さよ知りました。いろいろな思いを打ち絶つて、やっと  
自を出すことが出来たのです。」

さちこはちらりと父を見る。

「そして、父が昨日を新しい出発点としたように、私は今、この場  
を持つて出発点とします。いま、私は父が私の父と言うことを誇り  
に思います。そして強い父を尊敬し大切にしたいと思います。」

風花、途中で来た風鷺は目を閉じてさちこのスピーチを静かに聴い  
ていた。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1445a/>

---

さちこと風駕のフーガ

2010年10月9日00時04分発行